

#### 4. 座右の銘

### 「誠実」、そして「忍耐」

芥川記氏の座右の銘は、「誠実」である。染織試験場に入ってから40年、染色技術においても人間関係においても、つねに誠実に向き合ってきた。誠実さによって、助けられたことはたくさんある。「技術にしろ、人間との付き合いにしろ、人生にはいろんなことがあると思うんですよ。間違いもあるし、相手から誤解を受けることもあるでしょう。でも、誠実に対応しておれば、たとえ誤解が生じたとしてもいずれは理解してもらえる、という意味の言葉です」と芥川氏は話す。

一方で、誠実だけではうまくいかなかったこともたくさんあった。そういうときは、耐え忍ぶ。「これはオフレコですよ。あまりいい言葉じゃないし」と芥川氏は静かに話をつづけた。「わたしにとって人生は『忍』の一文字ですね。仕事にしろ、人間関係にしろ、時代もあつたと思いますが、耐え忍ぶことで、うまくやってきた部分はあります。」

「誠実」と「忍耐」、これが芥川氏の人生を歩むうえでの座右の銘であり、戦後から20世紀後半を生き抜いた職人氣質の技術者を形容する言葉に相應しい。

#### 5. 若い世代に向けてのメッセージ

### 売れるということに固執せず、つねに挑戦していく その姿勢が時代を切り拓く


染織試験場時代、芥川氏は染色技術者の立場から現状に留まるのではなくオピニオンリーダーとしてつねに挑戦しつづけてきた。そ

れは、試験場が産地の情報発信の中心にいたからだ。技術についても製品についても、産地のひとつのメーカーがカバーしきれない部分をサポートし、専業に専念できる環境を提供することが仕事だったからである。

タオルを使って何かをつくろうとおもえば、何でもつくれる。芥川氏が現役の頃、タオル地で背広をつくったことがあった。つくった張本人も、こんなものが売れるとはさらさらおもっていなかったが、とにかくつくってみる。この挑戦が、時代を切り拓いていく。しかし、大切なのは、品質を落とさないことだ。「技術にこだわりながら、挑戦していく。そのなかから市場性をもった商品が生まれる。品質を落とすことなく、世界に羽ばたく『今治タオル』としてさらに発展してほしい」と芥川氏が若い世代にエールを贈る。

40年間という約半世紀にも渡る長い時間を染織試験場の染色技師として過ごし、染色技術にかけてはつねに最先端を目指してきた芥川氏だけに、若者へのメッセージが「挑戦」であることは感慨深い。染織試験場の役割を十分に理解していなければ、この言葉は出てこないであろう。

## 6. お薦めの本

芥川氏がいま愛読しているのは、朝日新聞で2014年4月から連載がはじまった夏目漱石  の「こころ」である。朝日新聞では、ちょうど100年前の1914年の4月から8月にかけて「こころ」を連載していた経緯があるが、名作誕生100年を記念し、ふたたび夏目漱石のベストセラーをとり上げた。

舞台は武家の古都・鎌倉。漱石みずから「自己の心を捕えんと欲する人々に、人間の心を捕えたるこの作物を奨む」という広告文を出した、漱石の代表作である。近代という時代を、漱石独自の観点から斬った小説とも言える。



夏目漱石『ココロ』岩波書店、1989年。

（今治市立図書館所蔵）

タオル人生から離れ、いまは自宅でゆっくりと新聞を読む毎日である。とはいいつつも、2014年に新しくなった旧染織試験場、現在の媛県産業技術研究所繊維産業技術センターの活躍を、第二の故郷・西条から静かに見守りつづけている。（完）

（文責・インタビュー： 辻智佐子）



#### 編集後記

2014年4月に移転したばかりの媛県産業技術研究所繊維産業技術センターで芥川記さんと待ち合わせをし、センター内の会議室をお借りしてインタビューをおこないました。西条市のご自宅からみずからハンドルを握り、車で40分。ピシッと背広を着こなし、終始、好好爺しい笑顔を浮かべてお話を聞かせてくださいました。さすがに背広はタオル地ではありませんでしたが、タオル一筋40年のキャリアを彷彿とさせるオーラを感じました。現役を引退してから20年以上の歳月が流れましたが、後輩たちを想う気持ち

は少しも色褪せていませんでした。こんな先輩が近くにいるからこそ、センターは菅原利鏝以来の伝統を継承できているんだと、改めて産地の奥深さを感じました。（辻）

#### 次回の「タオルびと」

「タオルびと」の十人目は、タオルメーカー専属のタオルデザイナーだった小野 颯子氏である。タオルは原料から販売まで徹底した分業体制のもとで製造販売されていたため、タオルメーカーが専属のデザイナーをもつことは希有であった。そのような時代に、美術学校を卒業したばかりの新進気鋭の若き女性がタオルメーカーに入り、女性の感性を生かしたユニークなタオルを世に送り出してきた。クリエイターとしていまでも現役の小野氏にタオルとの人生を話していただく。

